

ウナギの魅力

～取材から見た生態、食文化、職人、人との歴史～

謎を秘めた「ウナギ」の生態

土用の丑の日を前にした7月18日、名古屋市環境学習センター「エコパルなごや」で、水産ライター新美貴資さんを講師に、ふれあいトーク『ウナギの魅力』が開催されました。

世界に19種・亜種が存在する「ウナギ」のうち、日本には二ホンウナギとオオウナギの2種類が生息しています。ここでは、一般的に食されている「二ホンウナギ」について学びました。

二ホンウナギは、東アジア一帯の河川や河口のあたりに分布し、産卵時期になると太平洋のマリアナ海域へ向かい産卵します。ふ化すると、黒潮にのって、フィリピンから東アジア沿岸を回遊して北上。シラスウナギと呼ばれる稚魚へと変態し、河川や河口で約10年過ごした後、成熟した銀ウナギへ。そして、秋に再び産卵場所となる海を目指します。一生のうちに海と川を行き来する不思議な魚です。



講師

水産ライター
新美 貴資 さん

東海3県を中心に、漁業や生産者の取組、海の祭り、里山川海の伝統・暮らしなどを取材。ウナギ業界の専門紙「日本養殖新聞」の記事制作も担っています。



壁を登ったり、草原をはったり、ウナギの生命力と遡上力は凄まじい！



時代を超えて続くウナギの文化

「ウナギ」といえば、蒲焼きや鰻丼。スタミナ食としても人気のウナギは、いつから日本人にとって馴染み深い存在となったのでしょうか。各地に伝わるウナギの食文化や信仰について、の話も披露されました。

新美さんが食べ歩いたウナギ料理の紹介も！



ウナギ食は縄文時代から

日本では、縄文・弥生時代の遺跡からウナギの骨が見つかっています。その後、ぶつ切りにしたウナギを串にさして焼く元祖蒲焼きのスタイルへ。江戸の元禄時代になると、現在のような蒲焼きが庶民の間にも広がるようになりました。

しかし、土地によっては“ウナギは神様の使い”として食べない地域もあり、各地でもウナギを祟め祀る神社仏閣が多く存在しています。

このことから、ウナギは古来から日本人にとって馴染みある魚だったことが伺えます。

全国各地の神社仏閣でウナギが祀られています。



星宮神社(郡上市美並町粥川)

ウナギ絵馬の奉納も。なかには江戸時代からのものがあるとか。



徳蓮寺(三重県桑名市多度町)

明治時代に養殖がスタート

明治時代に、天然のクロコ(幼魚)を捕獲し、池で育てるという方法で「養鰻」が始まりました。今や日本で消費されるウナギの99%が養殖によるものです。

しかし近年、種苗となるシラスウナギが不漁続きで、価格もうなぎ登り。ウナギ関係者に大きな影響を与えています。

そんな中、進められているのが「完全養殖」へ向けた取り組み。2010年には完全養殖のサイクルを達成。まだ量産化には至っていませんが、日本の食文化を継承するための一助となりそうです。



ウナギの幼魚

藤前干潟ふれあい事業ってなに？

伊勢湾の最奥にある「藤前干潟」は、渡り鳥の大切な中継地で、カニや魚など数多くの生きものが生息しています。藤前干潟ふれあい事業では、この「藤前干潟」の保全・活用を行っていくため、名古屋市や環境省、愛知県、NPOなどが協働し、通年で「藤前干潟」とふれあう様々なプログラムを企画しています。



ウナギを守るために私たちができること

天然のシラスウナギが捕れなくなっていることから、現在、二ホンウナギはランクの高い絶滅危惧種に指定されています。その原因は、乱獲や環境破壊、気候変動など。そこには、私たち人間の消費・経済活動も関係していました。

しかしこれは、ウナギに限ったことではなく、全国の海で起きている魚介類の不漁や大量へい死などにも言えること。私たちは今一度、限りある資源の持続的な利用のあり方を考えていかなければなりません。

ウナギ減少の理由

乱獲

漁業、遊漁

環境破壊

ダム、堰、埋め立て、汚染

環境変動

温暖化、海流変化

そのほか、農薬による影響も指摘されています



ウナギ関連の本や業界新聞も展示されていました。

ウナギ資源保護の取り組み

新美さんの取材から、各地域で行なわれているウナギ資源の保護活動を知ることができました。その内容を紹介します。

石倉かごの設置 (山形市・美山漁協)

伝統漁法を用いたウナギの住みかづくり。石のすき間が生息場所となります。



魚道の整備 (名古屋市・庄内川)

魚道の整備や構造物にブラシや芝マットを設置し、ウナギの遡上を助ける取組が各地で進んでいます。



親ウナギの保護・放流 (長良川)

親ウナギの産卵を手助けするために行われています。



消費者を招いた勉強会 (津市)

実際にウナギに触れ、その文化や伝統を知ってもらうと開催しています。



講演の終わりに、新美さんは「私たちの暮らしは海と繋がっています。漁師さんが獲った命を大切にいただくこと、海・川を汚さないよう、プラスチックごみを減らすことなど、自分ができることから始めてほしい」と参加者らに呼びかけていました。

